

2017年10月購入図書

No.	図書名	内容	著者名	出版社
1	裸足で逃げる ～沖縄の夜の街の少女たち	それは、「かわいそう」でも、「たくましい」でもない。この本に登場する女性たちは、それぞれ人生のなかの、わずかな、どうしようもない選択肢の中から必死で最善を選んでいる。それは私たち他人には、不利な道を自分でえらんでいるようにしかみえないかもしれない。沖縄の女性たちが暴力を受け、そこから逃げて、自分の居場所を作り上げていくまでの記録。	上間陽子	太田出版
2	シングルマザーを ひとりぼっちにしないために	心にしみる本。「ずっと一人で背負って一人で頑張ってきたママさん やっと出会えましたね大丈夫。」シンママが応援団につながって、声を上げれば手が差し伸べられることを体験し、元気になっていく様子に、自分の地域で何ができるかを考えさせられます。	シンママ大阪応援団 芦田麗子監修	日本機関紙出版センター
3	男尊女子	男女差別意識は女性の中にもあるかもしれない。男尊女子とは「女は男を立てるもの。女は男をたすけるもの」という感覚に生きがいを感じちゃっている女子のこと。女は下、か。平等は幸せ、か。男を立てねばと考える女は、夫のことも「主人」とよぶ。「主人」派はどこか自慢げだ。私にも経済力はあるけど夫をちゃんとたててるのよ。具体例からあぶりだす、女性の深層心理。	酒井順子	集英社
4	母ではなくて、親になる	育児を「夫に見てもらおう」「旦那さんが協力的でいいですね」という言葉への違和感。「女性作家」「母」という言葉のへの違和感も同様だが、夫との関係の中で自分が「主体」と感じられる言葉を使い、良い関係を続けられるように妥協はしない。ふたりは、父・母になるのではなく、「親になる」ときめた。	山崎ナオコーラ	河出書房新社
5	主婦ほど クリエイティブな仕事はない	「50代以降の女性の生き方」に注目する。一心に育てた子供も巣立ち、深い喪失感に襲われる50歳前後。一人抜け殻になっているなんてもったいない。専業主婦は「キャリア」であり、そんな潜在的能力の塊のような50代専業主婦が活躍できないのは外の壁(就職先がないなど)がある一方、自身にも「自信はないが、安売りはしたくない」など壁をつくっている。頑張りのレベルはひとそれぞれ、子育てを培う許容力の賜物「心の余裕」を活かし、女の人生を選択すべき。	薄井シンシア	KADOKAWA
6	ヨチヨチ父 とまどう日々	パパは共感、ママは落胆。ママっていつもイライラしてるよね？ パパって何か蚊帳の外だね、、、。話題の絵本作家が父になってわかった ”とほほな真実” はじめて「父」になった戸惑いを描く初の育児エッセイ。	ヨシタケシンスケ	赤ちゃんとママ社

7	さらさら流る	28歳の井出堇は、かつて恋人に撮影を許した裸の写真がネットに流失していることを偶然発見する。その場で消去したはずの写真、なぜ6年もたって、この写真が出回るのか。はたして恋人が流したのか。堇は、友人の協力を借りて調べながら、恋人との付き合いを思い起こす。過去の不安を追いかけながら、魂の再生問う感動長編	柚木麻子	双葉社
8	子どもはみんな問題児	名作絵本「ぐりとぐら」の生みの親は、母であり、多くの子供を預かり育てた保母であった。焦らないで、悩まないで、子どもは子どもらしいのが一番。「いざという時、子どもは強い。「ナンバーワンは、おかあさん。」「がみがみ言いたい気持ちを本で解消」。45のメッセージを収めた、心ほぐれる子育てバイブル。	中川李枝子	新潮社
9	恋するディズニー 別れるディズニー	本書はディズニーの皮を被(かぶ)った男女論である。男性と女性の行動学的な違いや時間の使い方の差、価値基準などによる思考感覚の違いを滑稽洒脱な表現で分析。また、ハッピーエンドの基本型は「王子様と結婚して幸せに暮らしました」である。しかし、ディズニーアニメの王子は存在感が薄い。王子はヒロインを幸せにする触媒にすぎず、女性はその後と自力で幸せになっていく。	堀井憲一郎	新潮文庫
10	読書で離婚を考えた	芥川賞作家の夫とホラー作家の妻が、相互理解のために始めた読書リレー。丁々発止の往復書簡は、まさに夫婦漫才。ところが課題図書を薦め合うにつれて、ズレが浮き彫りに、、、、果たして二人はどうなる。書評本としても夫婦論としても楽しめる	円城塔(夫) 田辺青蛙(妻)	幻冬舎